

図画工作科

野 島 慎 二
中 川 佑 紀

1 図画工作科における「よりよい未来を志向する子」

新学習指導要領では、教科における見方・考え方を働かせることが深い学びを実現するために重要とされている。図画工作科では造形的な見方・考え方を「感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点でとらえ、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」と定義している。また、「自分のイメージとは、児童が心の中につくりだす像や全体的な感じ、又は、心に思い浮かべる情景や姿などのことである」と、書かれている。このように、表現及び鑑賞活動を通して造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわる資質・能力を育成することをめざしている。

そこで、本校の図画工作科では、自分のイメージをもちながら、思いとこだわりをもって表現できることをめざす。思いとは、表そうとすることや表したいことである。こだわりとは、思いを形や色で表すための根拠となるものである。また、教師や友達などの他者とのかかわり合いや自己と作品とのかかわり合いを大切にしていく。こうしたかかわり合いを受け、思いに合うこだわりを更新できる場や、十分に試行錯誤できる場を設定する。そうすることで、子どもは、これまでとは異なる新たな意味や価値に気づき、自己や自分の作品と向き合うことにより自分の見方・考え方を深め、表現を追求し、感性を育てていく。

以上のことから、図画工作科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・自分のイメージを広げ 思いやこだわりをもち 表現し続ける子
- ・かかわり合う中で 新たな意味や価値に気づき よりよい表現を追求する子
- ・今までの学びを生かし これからの実生活へとつなげる子

2 図画工作科における未来へ生かす決める授業デザイン

図画工作科における決める授業では、題材と出会い、思いやこだわりをもって表現し、ふり返ることを大切にしていく。導入では、題材や主題と出会ったり、作例や作家の作品に実際に触れたり、作品に込められた思いを聞いたりすることで、自分のこととしてとらえやすくしていく。

題材との出会いから自分の思いをもち、どんな形や色で表現するか試行錯誤する。形や色などで表現していくうちに、よりよい形や色などを追求し始めていく。しかし、子どもはつまづいたり、活動が停滞したりすることがある。そこで、かかわり合うことで、新たな意味や価値に気づき、より思いに合った形や色を決めることができるようにしていく。

今までの学びをこれからの実生活へとつなげるために、授業の中で思考や表現の過程を蓄積し、客観的にとらえられるようにする。その時間で考えたことや気付いたことをふり返ることで、新たな目で自分の作品を見つめ直したり、反映したりすることができる。この経験を積み重ねることで、自分の作品を客観的にとらえ、更新していくことができるであろう。

そして、題材終末時には、省察を行う。この題材で習得した知識・技能をワークシートに書きためていく。これまで書きためてきたものを見返すことで、自己の成長を実感することにつながるであろう。さらに、この題材での学びを、これからの題材や生活の中でどのように生かすことができるかについても同時に考えていく。そうすることで、新たな課題と出会ったときに、過去の活動時の思いや表現などを思い起こし、これからの実生活に生かしていくことができると考える。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

形や色にこだわりをもち表現するためには、自分の思いをもつことが不可欠である。教師が子どもに思いをもたせるために、自分のこととしてとらえられるような題材や主題、材料を吟味する。そして、目的意識をもち、イメージを広げられるように題材や主題を提示する。また、視覚や聴覚だけでなく、材料の手触りなどの触覚も含め五感を刺激する提示をすることで、「おもしろそう」「やってみたい」と、思うことができるようにする。

さらに、鑑賞から発想のしかたや表現方法を考えさせたり、作家の作品に出会わせたりして、自分の思いをもつことができるようにする。

他にも、表現したいものに広げていくために、文字やキーワードからイメージをもたせることができるようにする。そうすることで、子どもは自分の生活と結び付けたり、ふり返ったりして言語化し、表したいことを思いつくであろう。

次に、題材と出会った子どもが自分の思いをもつために、試すことができるような時間を確保する。小さめの紙などの材料を準備しておき、納得がいくまで試す活動をくり返すことができるようにする。そうすることで、自信をもって作品づくりに取りかかることができると考えている。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

子どもは、造形活動の中で自分の思いを形や色にこだわって表現していくうちに、よりよい表現を追求していく。子どもはつまずいたり、活動が停滞したりすることがあるため、かかわり合いの場を設定する。

かかわり合いの中で自分の思いや表現方法を決めることができるように、ヒントコーナーや資料を工夫する。そうすることで、そこに集まる友達との対話からかかわり合いがうまれる。また、意図的、即応的にかかわり合いの場も設定していく。イメージを深めたり思いを明確化したりするためのペア・グループでのかかわり合いや、イメージを広げたり困り感を解消したりするための全体・フリーでのかかわり合いなどの形態についても吟味していく。こうしたかかわり合いの後に、得たことを全体へと広げていく。

このようなかかわり合いによって得た新たな意味や価値を、自分の作品に反映させることができる時間を確保する。かかわり合うことと表現することをくり返すことで、自分の思いがより具体的になり、形や色のこだわりも深まり、よりよい表現を追求していくことにつながっていく。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

自分の思いやこだわりをもって表現するために、アートブックを活用する。このアートブックには、授業の中での思考や表現の過程を、付箋やワークシートに記録し蓄積する。蓄積したものを見返す中で、客観的にとらえることができ、新たな意味や価値をふり返ることができる。そして、自分の思い、作品の形や色へのこだわりに対する変容、自分の成長に気付くことができる。さらに、実生活を想起し、自分の思いと結び付けて考えることで、形や色へとつながると考えている。

また、題材終末時には、省察を行う。この題材で習得したことをワークシートに書かためていく。これまで書かためてきたものを見返すことで、自己の成長を実感することにつながると考えている。さらに、この学びを生かし、これからの題材や学年、将来の実生活にどのように生かせるかも考えて書き足していく。このような省察を通して考えていく経験から、実生活の中でも生かし、実生活を豊かにすることができると考えている。

4 実践例

未来へ生かす決めるを促す授業デザイン～ふりかえり・省察から見えてきたこと～

① 2年「星にねがいを～ひみつのたまご～」の実践

2年生になり、初めてオイルパステルで表現する題材として「ワクワクの花」を設定した。この題材は、「星にねがいを～ひみつのたまご～」より以前に、設定した題材である。オイルパステルを使い、塗る強さや色の組み合わせ、重色など様々な表現で試す経験をした。また、かかわり合いから、形や色によって、伝わるイメージが変わってくることに気付く姿が見られた。

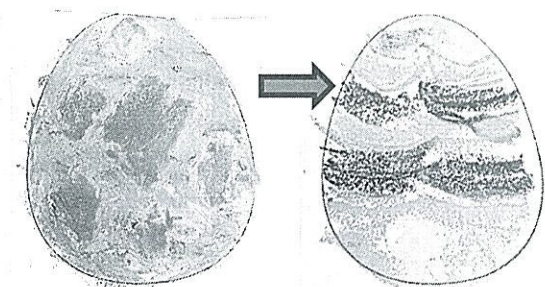
本題材「星にねがいを～ひみつのたまご～」は、星に願うことを自分の思いとしてもち、現実の世界から離れ、イメージをふくらませ、自由に様々なものや世界を想像していく題材である。題材との出会いとして、「星にねがいを」という教師が自作した絵本を読み聞かせた。この絵本のストーリーは、以下の通りである。

夜空を見上げてみると、流れ星とともにたまごが手の中に飛び込んできた。「あ！たまごだ！」と思い、家族に相談すると、「たまごは、あたためることで何かがうまれるんだよ。」と教えてもらった。そして、たまごの親となり、来る日も来る日もあたため続けると、たまごに色や模様が表れはじめた。

読み聞かせをしながら、子どもに動作化させ、題材を自分のことととらえられるようにした。色や模様が表れはじめたことから、「たまごへ愛が伝わった」という気持ちや「もうすぐうまれてくるかも」という期待につなげた。そして、その願いを自分の思いとしてもち、たまごの色や模様を決めていった。その後、たまごからうまれてくる音やたまごの割れ方を考えさせた。うまれてくるものによって、音は変わる。また、うまれてくるものによって割れ方も変わる。割れたたまごを色画用紙に貼り、うまれてきたものを表現した。

授業ごとに、L（わかったこと）、F①（友達の表現のよさ）F②（友達から見た自分の表現のよさ）、T（これからやってみたいこと、感じたこと）の4点について、付箋を使って書きためていくふりかえりを行った。また、題材終末時には、本題材を通してわかったことや発見したこと、気づいたことなどを自由記述でワークシートに書きためるようにし、省察を行った。

「星にねがいを～ひみつのたまご～」でA児は、「世界一はやくて泳ぎがきれいな水泳選手になれますように」と願いを決め、たまごに現れた模様を考えていった。そして、水をどのように表現するかを試行錯誤した。1回目の試作をしたあとのLには、「水の中の光のキラキラをかくと、プールみたいになりました」と書いていた（資料1 交流前）。その後のF①には、同じように水をイメージした表現を見て、「水色と青のしま模様があざやかできれいでした」と書いていた。そして、Lには、「水色と青で波みたいの模様になるとわかりました」と書いていた。友達の表現を見たあとの模様にも、変容が見られた（資料1 交流後）。F②には、「黄色の光のがきれいだね。」と言われました」と書いていた。Lには、「光をかくと、よりプールっぽくなるとわかりました」と、書いていた。これらのふりかえりから、A児が自信をもって表現したことが見てとれる。



資料1 交流前→交流後

第2次では、音や割れ方にイメージを広げ、うまれてくるものを表現した。A児のワークシートには、「うまれてくる音は、水泳の大会で優勝したときにもらえる金メダルがいっぱいもらえている音で、『キラキラキラ』だよ」と書いてあった。うまれたものについて、「大好きなねこを見ていると、もっとがんばれそうだから、水の中からうまれた水色のねこだよ。」と、話していた。第2次1時の終末のTには、「Bさんの黄色とオレンジと白をまぜた色が使えそうです」と書いていた。そして、2時では、光っている部分をその色で表現し、Lには、「黄色とオレンジと白をまぜた色ができました」と書いていた。さらに、「黄色よりももっと強く光っている光をあらわしたかったから、色をまぜたらぴったり合う色ができた。」と、話

していた。

A児の完成した作品は、資料2である。たまごは、波を青と水色でしま模様にし、たまごの下と上には、プールに反射した光を黄色でダイヤの形に表現していた。そのたまごは、ふたが開くように割れていて、周りには、水泳大会でたくさん金メダルをもらっているイメージで、黄色とオレンジと白をまぜた色でキラキラ光っている形を表現していた(資料2)。大好きなねこは、たまごと同じ色と模様で表現していた。そのねこがたまごの中からひょっこりうまれている。

このことから、L・F・Tでふりかえり、省察することによって、はじめの自分と、今の自分の変容に気付くことができた。本題材のA児の省察では、「はじめは、黄色しか使わなかったけれど、Bさんの色でキラキラをかくことにしたら、いいあらかたができたと思います」と書いてあった。また、「これからも友達の表現を参考にしたい。」と、話していた。今後も友達の表現を見て、未来に役立てようとしていることが見てとれた。

さらに、前題材で省察したことで、本題材の表現につながっていた子どもの姿もあった。B児の作品は、資料3である。B児の省察には、「ワクワクの花のときに見つけた白をまぜるわざを入れたよ。てんてんをかくと、より『ねこと一生くらしたい』という気持ちを表現できた。エメラルドグリーンをつかうと、より『一生くらしたい』という気持ちがわかる作品になった！光っているのを表現するときは、白、黄色、オレンジの順番にまぜて、さいごにぼかしたら、より光っているのを表現できた！このわざをこんどつかいたい」と、書いてあった。前の題材での表現、つまり、点描での表現や白を混色して光っているように表現することを生かせることやこの題材で見つけた表現を組み合わせることで、自分の思いに近づく作品になったことを省察に書いていた。

今までの学びをふり返ることで、友達とかかわり合うことのよさや学びを生かすよさに気付き、未来を志向する子どもの姿があったと言える。

②5年「糸のこスイスイ ～飾って楽しめるオブジェづくり～」の実践

本題材は用具として電動糸のこぎりを使う工作題材である。電動糸のこぎりを使って板を曲線切りし、生まれた形から発想して材料を組み合わせる新たな形をつくり出す内容である。今まで図工室で目にしている機械だが、実際に刃を取り付けて板を曲線に切る行為は、初めはスリリングながらのちに心地よく楽しいものとなる。主題は「飾って楽しめるオブジェづくり」とした。切った形や材料の組み合わせをいろいろと試しながら、それらがつくり出す形の特徴と自分の表したいイメージを照らし合わせ試行錯誤しながらつくるにはよい題材と言える。

本題材では、毎時間、L(分かったこと)、F(友達の表現でよいと思ったこと)、T(これからやってみたいこと、感じたこと)の3点を観点とし、記述によるふりかえりを行った。また、題材終末時には省察を行った。省察では、題材の始めと終わりをくらべて、分かる(できる)ようになったこと、この学習をどのように生かすか、次にどんなことを学びたいかの3点についてふり返った。

本題材ではパーツを組み合わせた立体物が自立することを条件とした。4月に行ったアルミ線を材料とした工作でも、土台を使わず作品自体が自立することを条件とした経緯がある。本題材でも「自立」の言葉を板書に位置づけた。1時のふりかえりで37名中6名、3時のふりかえりで2名、題材末の省察では11名が「自立」「バランス」「しっかり立つ」等のキーワードを記していた。平面状態である板に切り込みを入れて組んでいく立体物をつくる上で自立することは大事な要素であり、製作する上での条件となる。ふりかえりや省察を行っていく中で、子どもは自立を意識しながら製作を進めたことがうかがえた。出来上がった作品のほとんどがバランスをとりながら自立しており、高さのあるものとなっている。

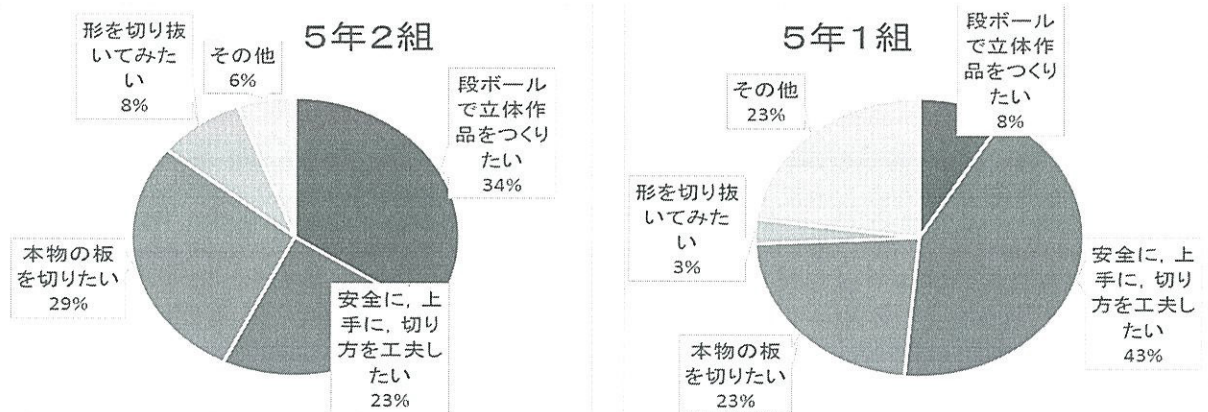


資料2 A児の作品



資料3 B児の作品

第1次1時のあとのふりかえりで、2学級のTについての記述の差に着目した。5年2組は2時に切った段ボールパーツを組み合わせて立体をつくることを伝えていた。Tで1番多かったのは「段ボールで立体作品をつくりたい」で、全体の約34%だった。5年1組でも第1次1時は段ボールの板を切ったが、5年2組の時とは違い、あえて2時以降にすることを伝えなかった。ふりかえりのTで多かったのは「安全に」「上手に」「切り方を工夫したい」で、全体の約43%だった(資料4)。つまり、先のことを伝えればTにその内容のふりかえり

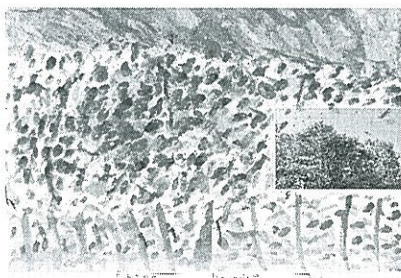


資料4 2組と1組のふりかえり内容の比較

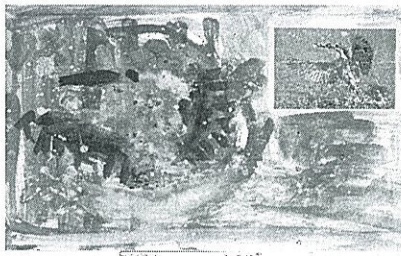
が増え、逆に先のことを伝えなければ、その授業で学んだことを中心に向上心をもったふりかえりが多くなることが分かった。このことから、本時の学びに気付かせるためには、まずふりかえりを書きそのあとに先のことを伝えて見通しをもたせることがよいと考えられる。

そのほか、ふりかえりシートや省察に書かれた言葉の中で、「もっと」という言葉が使われていることがあった。「もっと」から子どもの意欲を感じる。例えば、「もっとおもしろい形をつくりたい」「もっと複雑に切ってみたい」「もっと形を変えて、いい作品をつくりたい」「もっとしっかり組み立てて立体的にしたい」「もっと大きい作品をつくりたい」などである。これらは自分の表現を現状からさらによくしたいという向上心であり、これは未来を志向する表れと考えられる。

③5年「まだ見ぬ世界」の実践



資料5 C児作品



資料6 D児作品

本題材は、心にとまった写真から、まだ見たこともない世界の形や色を想像し、表し方を工夫して絵に表す題材である。事前に教科書でどのような題材かを説明し、写真を用意するように伝えた。写真は本人や家族が撮った写真や、雑誌などの切り抜き、インターネットから選んだ画像でもよいことにした。2週に渡り4時間の授業で、ふりかえりシートは1週目の2時間が終わる前に書いた。

C児はL(分かったこと)で、「たくさんの技法はこんなところに役立つことが分かった」と記していた。前学年の4年生の時に、スパッタリング、ドリッピング、マーブリング、点描など様々な技法を使って表現することを学んだ。その時に学んだ技法を使って表す友達の表現を見て、そのように記した。実際にC児は点描の技法を使って作品を仕上げていた(資料5)。D児はLで「抽象的に描くには色々な技が必要だということ」と記していた。また、T(これからやってみたいこと)では、「水しぶきをしっかり表したい」と書いており、

作品では白色で重色やドリッピングで水しぶきを表現した(資料6)。題材のはじめとおわりをくらべて、分かる(できる)ようになったことは何ですかという質問に、「自然に技法を使えるようになった」「抽象的に描くことができた」など、「技法」「抽象的」というキーワードを使って書いた子どもが34名中、半数の17名いた。このことから、本題材で子どもはどんな絵をどのように描くかを理解し、製作中も意識し続けて製作できたことが見てとれた。

E児はLで「遠くの色はうすくして、手前の色は濃くするといい感じだった」、Tで「次は海を塗るのでいろいろ工夫ができるといいと思う」と書いた。次時の図工の時間に遠近を意識して水の量を調節したり、銀色を重ねて塗ったりなど彩色の仕方を工夫できていた(資料7)。



資料7 E児作品

1学期間に行った三つの題材についての省察を個人の変化として辿ってみた。5月にF児は針金工作題材の省察で、これからこの学習をどのように生かせそうかという質問に、「のちのことを考えて頭で立体をつくること」と答えた。その2ヵ月後の木工工作で、題材のはじめとおわりを比べて、分かる(できる)ようになったこととして「頭の中で組み立てる想像力」と書いた。つまり、5月に今後できそうだと考えたことを7月に実行できたという省察であり、未来を志向し結果を出せた姿の表れと言える。

G児は5月の省察で、題材のはじめとおわりを比べて、分かる(できる)ようになったことは何かという問いに、「針金は手で少し動かすだけで立体になるから楽しかった」と書いた。また、これからこの学習をどのように生かせそうかという問いに対して、「立体にする時は柱のように太い柱をつくり、肉づけをするようにつくればうまくいった」と書いた。7月の省察では「立体的なもののつくり方がよく分かった」「もし夏休みに工作をしようと思った時、立体になるような工夫ができる」と書いた。このことから1学期の学習を経て、立体作品をつくるコツを体得し、夏休みの工作づくりに展望をもっていることから未来を志向していると言える。

5 成果と課題

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

題材や主題を吟味し、出会わせ方を工夫することによって、イメージが広がり自分の思いをもつができた。また、「やってみたい」という意欲を高めることができた。「ワクワク」という気持ちや「星にねがいを」という主題から、子どもは自分の思いに合う形や色にこだわりをもって表現していた。さらに、根拠を明確にし、その思いやこだわりを発表する場を設定したことによって、全員がよりよい表現を追求することができた。

工作では、試しの時間を確保した。試す時間を確保し、操作上の不安を軽減させることができた。また、新しい用具を使ってできることとして、曲線で切った板を組み合わせた見本を提示したことも学びへの原動力を形成することにつながった。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

自分の生活につなげたり、技能を広げたり身に付けたりするために、グループやペア、全体での交流活動を取り入れている。また、自分の発見したことや友達よさを伝えるための場を設置した。さらに、表現するときに必要な材料を、教室の後ろや前に置き、自然に友達の作品を見ることができ場を設定したりした。これによって、対話が生まれ、より自分の思いに合った表現を追求し形や色を決めることができた。

また、工作でははじめにグループ製作を行った。グループで協力して用具の操作に慣れ、共同で作品づくりをした。このことにより、のちの個人での製作で自分なりのイメージをもつことにつながった。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

授業毎にふりかえりを行い、題材終末時に省察を行った。ふりかえりを行うことにより、次時に向けての学習意欲を高めることにつながった。子どもは、自分の思いをもち形や色にこだわりをもって表現し、ふり返ることで次時や次の題材につなげることができていた。加えてふりかえりにより、教師は子どもの表現方法や思考を丁寧に見取ることができたので、個別指導に生かすことができた。

しかし、本時の学びに気付かせるため、ふりかえりを書くタイミングが大事なこともわかってきた。また、さらに実生活にもつなげるために、図画工作科としてどのように造形活動と向き合わせ、表現したり、かかわらせたりしていくとよいのかを考えていくことが必要である。